



Organization for Clinical Rehabilitation with Advanced Science and Effective Education

発行：NPO 法人 リハビリテーション医療推進機構 CRASEED / 年 4 回発行 / 第 15 号 (2010 年 9 月 10 日発行)
〒 560-0054 大阪府豊中市桜の町 3-11-1 関西リハビリテーション病院内 TEL 06-6857-9640 URL : www.craseed.org

第 47 回日本リハ医学会 学術集会◎参加報告

2010 年 5 月 20 日(木)より 22 日(土)の 3 日間、『今日の先端科学を明日のリハビリテーションへ』というメインテーマのもと、第 47 回日本リハビリテーション医学会学術集会が開催されました。

毎年 CRASEED では NPO 法人としてブースを設置しており、今年も各関連病院の紹介ポスターや新しい書籍「リハビリテーション評価データブック」(編集：道免和久)を陳列し好評でした。

初日の 20 日はランチョンセミナー 慶應義塾大学 藤原俊之先生の「脳血管障害者の上肢麻痺における装具治療戦略」から参加。上肢スプリントと EMS を組み合わせた HANDS 療法を中心とした話で、内容的には CI 療法の概念と共通する部分もあり、その効果は納得できるものでした。上肢の機能訓練に関わる話であったためか CRASEED メンバーも多く参加していました。その後、一般演題：脳卒中(歩行・治療)というセッションで自身の発表を行いました。今回は「底屈油圧制動機能付長下肢装具の使用経験とその効果」と題し、私が積極的に行っている重度片麻痺患者に対する装具療法の臨床データをまとめ考察を加えて発表させていただきました。自身

の発表後は疼痛関連や脳卒中(歩行・評価)など興味ある講演をいくつか聞き初日を終了しました。この日最も印象に残ったのは国立成育医療センターリハビリテーション科の橋本圭司先生の講演でした。

「高次脳機能障害リハビリテーション～診断・治療・支援のコツ～」と題し橋本先生が実際に行っている診断から支援までの一貫したアプローチに感動を覚えました。スライドは実際の患者様の写真も多用されており、さまざまな患者様の具合的なエピソードを交えて非常に分かりやすく話して下さいました。高次脳機能障害の患者支援には多くの社会的な障害もあり、私も頭を悩ますことが多いのですが、あらためて患者・家族に人として向き合わなければいけないと感じさせられました。

夜には、日本全国に散らばる CRASEED メンバーが集まり、道免先生を囲み和やかな会食が開かれました。地元の食材を使った美味しい料理に舌鼓を打ち、鹿児島島の夜は更けていきました。

翌 21 日は興味ある演題中心に多くの発表に耳を傾けました。学会でのさまざまな発表は大きな刺激となります。日常の診療におけるヒントも多く、「あの患者さんにはこんなアプローチも可能かも知れない」と新しい治療方針が生まれることも多くあります。また発表を通してディスカッションをすることで多くの先生との交流も生まれます。この日の夜には昨年の学会で交流が生まれた相澤病院リハビリテーション科の原寛美先生、下肢装具の研究で知り合うこととなった京都大学大



学院医学研究科の大畑光司先生、そして、日頃お世話になっている義肢装具士の皆さんと会食をさせていただきました。ここでは装具療法の最新の話題から装具療法の未来について熱く盛り上がりました。

また CRASEED の食事は前日にもまして参加者が多く、全国に散らばる CRASEED メンバーが集まり、こちらも大盛況だったようです。

最終日は朝からモーニングセミナーに参加、大畑先生による「脳卒中後片麻痺患者に対する底屈油圧制動装具の効果と歩行トレーニング」と題した講演です。この講演は大畑先生が PT であることもあり、より具体的にトレーニング内容、底屈制動装具の効果についてまとめられ、臨床に直結する内容だけに朝早くから大盛況の講演でした。また最終日のシンポジウム「片麻痺上肢への革新的治療法」では道免先生が CI 療法の理論と実際、今後の CI 療法の発展も含め講演され活発な意見交換がなされたシンポジウムとなりました。

3 日間にわたり行われた第 47 回日本リハビリテーション医学会でしたが、今年は特に充実した学会となりました。この学会で得た知識を日々の臨床で活かせるよう、また 1 年頑張ろうと新たに決意した学会となりました。

(勝谷将史)

目次

- ① 1... 第 47 回日本リハ医学会学術集会参加報告
- ② 2-3... CRASEED 2009 年度事業報告、2010 年度事業計画
- ④ 4... リハビリテーション科専門医試験に関するコメント
職種紹介：主任介護支援専門員

リハビリテーション科専門医試験に関するコメント

CRASEED 代表 道免和久

CRASEED 設立の目的は、質の高いリハ医療の普及であったわけですが、そのために最も力を入れたかったことは「リハ科専門医の育成」です。全国各地に専門医は点在するものの、どうやって専門医を育成するかというノウハウに蓄積がなく、一人の専門医が退職するとその病院のリハ医療自体が消滅する事態さえ起きています。いわばリハ科専門医の「再生産」体制は、全国のリハ科専門医達の悲願とも言えます。

そのような切迫した状況ですが、全国の大学にリハ科の講座ができるのを待っているのは、専門医の育成までに何十年もかかってしまいます。そこで、CRASEED は地域に関係なく、今すぐ専門医育成を実現することを目標の一つにしました。

その目標の通り、設立から5年に満たない2009年度に、同時に7人もの専門医が合格しました。この年の全国の専門医合格者数は49人でしたので、14%を私達の仲間が占めたこととなります。さらに、この合格により難関と言われるリハ科専門医試験に、21人連続合格という快挙を成し遂げました。素晴らしいことと思います。今後も、リハ科専門医をめざす人材を全国から集め、立派な専門医に育成すべく努力して参ります。

合格された皆さん、本当におめでとうございます。専門医はスタートにすぎません。これからスペシャリストとしての磨きをかけるべく、さらに頑張ってください。専門医としての幅広い臨床のスペシャリティはもちろん、さらに自分のフィールドを深めるサブスペシャリティの確立や研究活動にも努めて頂きたいと思います。

★児玉 典彦 先生★

1989年に医師になり、神経内科一筋で走ってきました。しかし2006年4月1日に兵庫医科大学リハ部へ転科し、CRASEED 会員になりました。転科当初はリハ科医が何をすればいいのかわからず、本当に右も左もわかりませんでした。道免先生よりセミナー、講演会、執筆の機会を頂き、その都度ご指導を賜りました。これら一つひとつが、私にとってのリハ医学勉強法でした。そして何よりも頼もしく、誇れるのは私たちの仲間から6人が専門医試験を受験し、全員合格したことです。みなさんも積極的に勉強を進めてください。

★新井 秀宜 先生★

兵庫医科大学ささやま医療センター地域総合医療学の新井秀宜と申します。道免先生をはじめ、たくさんの方の御指導を頂き、リハ科専門医になることができました。全国のリハ機関の中で、トップクラスのCRASEEDに所属していることに大変感謝しております。今後とも御指導を宜しくお願い申し上げます。

★當山 まゆみ 先生★

受験勉強を通して「リハ科医として自分に足りない知識や経験は何か」ということを確認することができました。リハは診療の対象となる疾患や障害が広く、

研修すべき細目を確認しながら日々の臨床の場に反映させていくことが必要だと思っています。この場を借りて、道免先生をはじめ御指導くださった諸先生方に感謝申し上げます。

★一角 朋子 先生★

道免先生を始め、医局の先生方には専門医試験まで色々御指導頂き、本当に有り難うございました。これまで、回復期リハ棟単科の病院で働いていましたが、4月より、ケアミックス病院で働いており、新しい発見の多い毎日で勉強になります。これからも、御指導・御鞭撻の程宜しくお願い致します。

★石野 真輔 先生★

なんとか合格しました。のんびりしていますので、試験の準備から勉強の進み具合について、CRASEEDの先生方の激励無しには合格は無かったと確信します。講演会も非常に役立ちました。専門医の片隅に置かれた訳ですが、「専門」といえるものは何なのかということはこれからの課題です。宜しくお願い致します。

★森脇 美早 先生★

私は大学在学中、4年生の時にリハ医学の授業で感銘を受けたことをきっかけにリハ科医を目指してまいりました。今後も更に勉強し、専門医としての臨床能力を高め、地域リハに貢献していきたいです。これからもよろしくお願ひ申し上げます。

★勝谷 将史 先生★

この度、無事リハ科専門医の資格をいただきました。CRASEEDを通じて多くの人との出会いが今の私を支えています。このような環境を与えてくださった道免先生、そしてCRASEEDの皆さまに感謝いたします。「Adding years to life」ではなく「Adding life to years」、大好きなこの言葉を胸にリハ医療に邁進していきたいと考えております。

リハビリテーション 関連職種紹介



13

今回は主任介護支援専門員（以下、主任ケアマネ）について紹介します。2000年に介護保険制度が施行され、2006年の制度改正で、高齢者を包括的継続的に支援していく目的で地域包括支援センターが創設され、同時に主任ケアマネが生まれました。介護支援専門員（以下、ケアマネ）が、利用者との契約のもとその人の生活を調整支援していくのに対して、主任ケアマネの役割は個々のケアマネの後方支援です。例えば、困難事例を抱えるケアマネの相談にのり、解決方法が見つけれられるように事例検討を行ったり、質の向上のための研修会を開催したりしています。

私の住む篠山市では、関わり方を検討する「気づきの事例検討会」や「権

主任介護支援専門員

利擁護・虐待防止研修会」などケアマネが幅広い知識と技術を身につけ、実践に活かせることを目的に行っています。また、市内のケアマネ同士が自由に語り合えるように座談会「けあまネット」の開催や情報誌「まねっと通信」を発行することで、ケアマネが悩みを一人で抱え込まなくてよいようにしています。今後は「こんにちはケアマネさん」という、事業所訪問型相談会も開催していく予定です。

もう一つの役割は、様々な機関との連携体制づくりです。それは、医療との連携や地域の社会資源との連携です。昨年からはじめたのが、「この指とまれ」という会です。この会は、ケアマネとリハ関係者・介護職者・医師が顔の見える関係となり、大きなネットワークをつくっていくことを目的としています。今では、看護師や医療相談員も加



わり、その輪も50人を超えるものとなり、毎回一つのテーマについてワイワイと語り合っています。このように、支援する人が情報を共有し、医療と福祉・保健・地域が声の掛け合いができるような顔の見えるネットワークをつくっていくことで個々のケアマネが動きやすくなり、個々の利用者の幸せにつながっていくように働きかけることも主任ケアマネの大きな役割です。（松本ゆかり）